

第1章 序論

1. 本論文の目的と意義

本論文は『玉塵抄』を中心とする室町期の抄物を資料として、室町期抄物における漢字音研究の実態を明らかにすることを目的とする。

日本古代から近世にかけて、儒学や中国仏教など、中国文化移入の隆盛にともない、中国文化を運ぶ漢字・漢文が大量に日本にもたらされた。日本人は中国文化を支え、またその中国文化の中心の一つである漢字を自分のものとするために、官僚、また儒学者や僧侶を始めとして、こぞって漢字の学習に熱中した。そして、その一環として中国音＝漢字音の学習に励んだ。すなわち、中国文化摂取の一環として漢字を学ばざるをえない日本人にとっては、当然常により中国原音に近い正しい漢字音を学習することが求められるようになった。

もともと、それは漢字文化圏の他の国々においても同じだったに違いない。日本における漢字音の場合は、その摂取や伝承が一様ではなく、多重的・多元的に行われてきた、その結果、漢字音に呉音、漢音、唐音の別ができたという特別の事情があった。これは、日本人は三系統の漢字音を学ばなければならないことを意味する。

このような、漢字と読みとにおける複雑な関係は、日本人に、ある漢字をある箇所ではどう読めばいいのかという問題を投げかけた。そして、その問題を解くための手段としての漢字音研究の発生と発達をうながした。しかし、それがどのようなものであったのかについての研究は、従来、漢語の本格的な日本語化が始まった平安期と、学問がきわめて盛んに行われた江戸中、後期とに焦点が向けられており、室町期が議論的になることはあまりなかった。

これに関わって、中国文化の2大摂取領域である仏教と儒学では、奈良・平安期以降、

使用する漢字音が異なっていた。さらに鎌倉期になると禅宗が成立し、盛んになった。日本における中国文化の二大摂取領域である仏教と儒学では、奈良・平安期から、使用する漢字音が異なっていたと考えられている。いわゆる呉音と漢音の問題である。さらに鎌倉期に成立し隆盛となる禅宗では、仏教はもちろん儒学も熱心に学ばれた。漢字音について言えば、両領域の漢字音すなわち呉音・漢音双方が用いられた。さらに、当時の中国音＝唐音も使われた。ここに、禅宗では異なる三つの系統の異なる漢字音をどのように使い分けるか、という問題が生じるとともに、それに応えるための禅宗内部での漢字音研究が行われていた。しかし、その実態の解明は今日までまだほとんど行われていない。

ところで、禅宗がしっかりと根付いた室町期になると、京都や鎌倉五山を中心とする、日本人あるいは中国人禅僧が、仏教だけでなく儒学をも含んだ中国文化紹介の完全な主役となっていた。彼らは、豊富な学識を背景として漢籍や仏典の注釈をしたり、儒書や韻書また字書などを出版したりした。漢籍や仏典あるいは字書や韻書などは、言うまでもなく漢字音と密接不可分である。当然禅宗でも漢字音研究が鎌倉期よりずっと積極的に行われたはずである。では、その実態をよく映している資料が何かあるのか、あるとしたらそれは何かという疑問が生じる。それに関しては、それは抄物と答えることができる。彼らが作った漢籍や仏典また国書の注釈書である抄物は、原典理解のために様々な文献を用いて漢字や漢語などの音や意味、用法を説明している。そして、さらには、独自に漢字の研究¹をも広く押し進めている。したがって、抄物は当時における漢字研究を知る上で貴重な資料となっているが、数多い抄物にあって特に惟高妙安が元代の韻書『韻府群玉』(1334)を講述した『玉塵抄』(1598)は、原典の『韻府群玉』が韻書であることから、室町期における漢字音研究のあり方を知る上で有力な資料となっている。この点に着目して、本論文は、『玉塵抄』を中心とした室町期の抄物を主な資料とし

¹本論文では、抄文の中の、韻書や字書などを用いて行なっている漢字や漢字音についての講述を、広く漢字研究あるいは漢字音研究などと呼ぶ。

て、当時における漢字音研究の実態を明らかにしていく。

そのために、まずは、『玉塵抄』とその原典である『韻府群玉』を引用文献の面から比較して、『玉塵抄』において、中国の文献がどのように受容されたのか、関心が寄せられていた漢籍はどのようなものだったのかを明らかにし、次にそれによって漢字や漢語についてどのような研究がなされていたのかを検討する。その後、直接漢字音研究と関わりのある字書や韻書の引用はどのくらいあり、そしてどの程度またどのように利用していたのかを検討し、『玉塵抄』の、漢字音研究資料としての基本的な性格を把握する。

以上のような文献学的な考察を踏まえて、以下では、惟高妙安講述の『玉塵抄』を主資料として室町期禅宗では、漢字音の系統のことや清音と濁音のことをどのようにとらえていたのか、どのような漢字音をどこで使うべきだと考えていたのか、またどのようにして正しい漢字音を得ていたのか、などといった漢字音研究に関する具体的な問題の考察から、当時の禅宗における漢字音研究のあり方を明らかにしていく。

なお、その際には、漢字音は中国文化だけでなく日本文化の主役でもあったことから、漢字音と儒学史や仏教史、さらには一般社会との関わりなど著者なりに考慮していきたい。そして、最終的には、日本における漢字音研究史ないし受容史の中に、室町期の漢字音研究を正確に位置づけたい。

以上のような研究方法によって、室町期の漢字音研究の実態を解明することは、一つ漢字音の使い分けやその根拠などを明らかにすることにおいて意義があるというだけでない。

すなわち、漢字音の使い方は仏教や儒学また日常生活に深く関わっていることから、日本における中国文化の摂取や文化の創造のあり方の解明にも通じることであり得ると考えられる。

2. 本論文の構成

本論文は、序論・結論を含む全9章となっている。

第1章 序論

第2章 資料と先行研究

第3章 『玉塵抄』における引用文献—『韻府群玉』との比較—

第4章 『玉塵抄』における韻書

第5章 『玉塵抄』における呉音と漢音

第6章 室町期抄物における漢字音の清濁

—『玉塵抄』と『詩学大成抄』を中心として—

第7章 『玉塵抄』における反切と字音

第8章 室町期抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」—用語の分布と意味—

第9章 結論と今後の課題

3. 各章の概要

各章の内容は以下に示す通りである。

第1章 序論

本論文の目的と意義を述べるとともに、本論文の構成を示す。

第2章 資料と先行研究

本論文の主資料である『玉塵抄』及びその原典『韻府群玉』を紹介すると同時に、本論文で取り扱う他の抄物や韻書また辞書などを述べる。その後、『玉塵抄』その他の抄物を資料としてこれまでに行われた、室町期漢字音研究の研究史を概観する。

第3章 『玉塵抄』における引用文献—『韻府群玉』との比較—

『玉塵抄』とその原典である『韻府群玉』とを、引用あるいは参照文献の面から比較して、『玉塵抄』の書誌的性格の一面を明らかにする。そのために、まず、『韻府群玉』と『玉塵抄』にはそれぞれどのような文献がどのくらい引用されているのか、また両者の引用文献は互いにどういう関係にあるのかを検討する。次に、その検討を踏まえて引用文献の面から両者の性格の相異点を把握する。その後、惟高妙安が『玉塵抄』において、原典『韻府群玉』とは無関係に独自に引いている文献の有無やその種類などを検討する。すなわち、『玉塵抄』に直接漢字研究と関わりのある字書や韻書がどのくらいあり、そしてどのくらい利用されているのか、また引用文献の中で字書や韻書が占めている位置を明らかにする。そして最後に、これらの検討の結果を踏まえて、室町期漢字音研究資料としての『玉塵抄』の性格を考えてみる。

第4章 『玉塵抄』における韻書

第3章での引用文献の調査に基づいて、韻書の利用という観点から、『玉塵抄』における漢字研究、漢字音研究のあり方を考えてみる。まず最初に、惟高妙安が『玉塵抄』の中で利用している韻書の内訳を検討して、彼が講釈の直接の対象である『韻府群玉』またその他の韻書をどのように利用していたのかを明らかにする。次に、それらの韻書が『玉塵抄』で用いられた書物の中で、それぞれどのような位置を占めていたのかを追究して、室町期抄物における韻書受容の一面を考察する。

第5章 『玉塵抄』における呉音と漢音

『玉塵抄』の中で当該漢字音の呉音漢音、または一つの漢字に複数の対立する字音を示しているところを取り上げ、室町期の学問の場において呉音と漢音の伝来がどのようにとらえられていたのか、またその当時どのような漢字音と漢字音が対立すると考えられていたのかを検討する。同時に、その対立に関わって、それらの漢字音は互いにどのような関係にあったのか、そしてそれぞれの漢字音の使い方は仏教や儒学また日常生活にどのよう

に関わっているのかなどをも考察する。つまり、①「経(経録・経文・教)デハ〜トヨムゾ」⇔「詩文デハ〜トヨムゾ」②「ソラニハ〜トヨムゾ」⇔「本(漢書ナド)デハ〜トヨムゾ」③「ツネニハ(ツネノ・ヨノツネニ)〜トヨムゾ」⇔「ココニハ〜トヨムゾ」④「ココラニハ〜トヨムゾ」の四つの形式で取り上げられている漢字音がどのようなものであり、どのように対立しているのかを、その音注において<墨筆—呉音><朱筆—漢音>という表示わけのある『文明本節用集』などを参照しながら、呉音漢音との関係を明らかにする。

第6章 室町期抄物における漢字音の清濁—『玉塵抄』と『詩学大成抄』を中心として

『玉塵抄』と『詩学大成抄』の中で、漢字音の「清」「濁」について触れている部分を取り上げ、抄文の中でその「清」「濁」の注記がどのように加えられているのか、どのような場合に、あるいはどのような根拠のもとで「清」「濁」が傍記または注記されているのかを検討する。その結果を踏まえて、「清」傍記や「清」「濁」注記のそれぞれの意図は何か、そしてその意図において両者間にはどのような相違があるのか、また、その意図は呉音漢音とどのような関わりをもっていたのかなどを考察する。

具体的な方法としては、被注字の『韻鏡』図上の位置を調べて、『玉塵抄』と『詩学大成抄』の中での「清」「濁」注記は、どのように位置づけられるのか、またその当時の呉音漢音の分類とどう関わっていたのかを探っていく。

第7章 『玉塵抄』における反切と字音

『玉塵抄』の中で、字音認定の根拠になっている反切とそれに関わる字音を取り上げ、その反切がどのように解釈されまた用いられているのか、その実態を引用文献と、反切による字音認定の方法という二面から検討する。次に、その反切から導き出された人為的な字音が、惟高妙安が反切とは無関係なものとして挙げた字音とどのくらいずれているのか、またそのずれがある場合、惟高妙安はそれをどのように処理していたのかを明らかにする。

その後、反切による字音、また反切とは無関係なものとして挙げた字音を『文明本節用

集』の漢音と比較し、反切から導き出された人為的な漢音が、その当時において実際に使われた漢音とどれくらい差があるのかを考察する。

第8章 室町期抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」一用語の分布と意味一

『玉塵抄』には「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」といった語句を用いて、漢字の読み方を示しているところがある。漢字音に関わる記事が比較的多いと判断される『玉塵抄』その他の漢籍の抄物に焦点をあて、「ヨミクセ」「ヨミツケ」などの語句の有無を調べ、以下の問題について考える。①室町期当時「ヨミクセ」などの語句はどのような漢籍の抄物において用いられていたのか。②「ヨミクセ」などはどのような読み方に対して用いられていたのか。③「ヨミクセ」などと呼ばれていた読み方は当時どこでどのくらい定着していたのか。④「ヨミクセ」などは、どのような漢字のどのような字音に関わる読み方について用いられていたのか、またそれはなぜか。なお、あわせてその過程で読み癖と当時の呉音漢音との関わりや読書音との関わりなどについても考えてみる。

第9章 結論と今後の課題

各章で述べたことをまとめて、本論文の結論を提示し、その後今後の課題について述べる。